

ディスカッション

●発言者

佐藤 若菜 (新潟国際情報大学) / 香室 結美 (熊本大学) / 松本ますみ (室蘭工業大学)

●司会

帯谷 知可 (京都大学)

帯谷知可(司会) コメントに対するレスポンスを、報告者の皆さんに順番にお願いします。

■消費可能化から文化財化への価値の転換と 実際の作り手・装い手たちの関わり

佐藤若菜 まず杉浦未樹先生、ありがとうございます。鋭いご指摘で、私もこれから結論を考えるにあたって、この点に注目しなければいけないと思いました。また山本真鳥先生の研究もぜひ参照したいと思っています。たしかに最初は収集の対象となっていました。それはあくまでもデザイン・リソースとして集めていたにすぎないので、これを消費と呼ぶのかどうかは難しいところです。もう少し厳密な議論をしなければいけないということがよくわかりました。

その後、1980年代以降にデザイン・リソースとして集められたものが展示品となるなかで文化財、たとえば「中国の宝」といったかたちに転換していきます。やはり日本と中国との関わりの部分から価値が変化していったと考え、もしかしたら消費可能に徐々になっていくなかで文化財に切り替わっていくというように、実際には中谷先生の事例とは少し違うのかなと思いました。

ローカル側の作り手や装い手の役割についてですが、これも私自身この研究に関しては弱いというか、すごく見えにくかった部分です。日本の展示会に「中国からも数名呼びましょう」ということになって、ほとんどは幹部と呼ばれる公務員の方たちが行きましたが、最終的に漢族ばかりになってしまっていて、「何人か少数民族を入れないとよくないのではないか」という話になったそうです。それで少数民族、プイ族やミャオ族を1人2人入れたという話もしていました。

しかし、彼らにインタビューをしてみると、日本の展覧会でワークショップなどをした際に、日本側からの「この模様はどんな意味ですか」といった質問に対しては、「知らない」と答えたそうです。そういった民族エリートの人たちも、「よくわからないので、とりあえず自分の知識のなかで答えたんだ」と話していました。

つまり、実際の作り手や装い手が文化財への切り替わりに直接関わるようになるのは、ずっと後になってからです。私が知る限りでは、1990年代になると、中国の内陸部、農村部が少しずつ少数民族地区を開放していきます。そのなかで、日本人をはじめとした外国人が現地の人々が着ている服を直接買い取るということが頻繁に行われるようになりました。そこから徐々に現地の人にも「これは売れるものなんだ」という認識が浸透し、さらに「古いものやアンティーク、骨董が売れるんだ」という意識になって、彼らが徐々に関わるようになっていったのかなと思います。

■アンティーク市場にのみ出回るムウの衣装で 見えづらい移民との関係

佐藤 移民との関係は、じつはムウについてはかなり見えにくいです。なぜなら世界中に広がっているミャオ族のほとんどがモンです。蒙の研究である宮脇千絵さんという方の研究書を見ると、ラオスから雲南へ、蒙の衣装の——蒙の衣装は主には工場で生産されていますが——注文があって、徐々に新しいデザインが生まれるという流れがあります。今回この2点、①価値の転換をもう少し厳密に見ることと、②作り手の影響をこれからもう少し詰めていきたいと感じました。

■ 手仕事と女性のエンパワーメントに関する 中国特有の事情

佐藤 杉本星子先生もコメントありがとうございました。美術品としてのアンティーク市場は、くわしい方は本当にたくさんいますが、私の財政的問題もあって、タイなどの、いわゆるアンティークが好きな方々が集まるような市場については、まだほとんど知りません。どうやらそういうアンティーク市場にもかなり流れているということは知りつつも、これも一つ課題だなと思いました。

手仕事が評価されるなかで東南アジアの特徴としては、女性のエンパワーメントとともに文化財に変わっていくということは、私も中谷先生をはじめとした先生方の本を読んで、たいへん勉強になりつつも、中国の事例ではちょっと違う部分があります。ムウの場合は、私の知る限りでは、日本の収集家が、貴州省に手仕事の継承者がいないので、まず学校を建てましょうということで、学校を建てて担い手を育てて、そのなかで手作りしたものを日本で売るということをしていました。くわしいことはわかりませんが、現在はストップしています。中国ではそういった技術や知識は外国人に取られてはいけないという認識があるので、私自身も調査対象が刺繍技術だと言ったときに、ある時期だけは調査許可がまったく下りないということがありました。おそらくこの収集家の方もいろいろたいへんなことがあっただろうなと思います。

最近では、中国の収集家が、ミャオ族女性が着ているものではなくて、図案をもとに様々な洋服やグッズを作っています。今日もこの発表にあたって動画を検索していたら、政策の一つとして「民族衣装を商品化して、貧困を改善するんだ」と言っていて、おそらくその流れに彼女はうまく乗って進めているのではないかなと思います。ただ、現地のミャオ族女性のエンパワーメントや手仕事への再評価についてはあまり進んでいないというのが中国の現状だと思います。

二つ目の漢服の流行による影響というのは、今後の課題とさせていただければと思います。いままさにいろいろな方が漢服の流行に注目されて研究をされているので、私も一緒に議論ができるように、少し勉強させていただければと思います。

帯谷 続いて香室さん、いかがでしょうか。

■ ロングドレスの商業規模と 若者と年記者とのせめぎ合い

香室結美 まず安城先生の質問に答えたいと思います。1点目ですが、国内外の商売規模については、基本的にはヘレロ内で流通が留まっている状況です。ヘレロの人やヘレロが雇った他のナミビア人がヘレロのために作るということです。全国的に見るとそこまで大きくはないですが、ヘレロのなかの一つの職業としては確立していて、多くは女性が作り手で、その方たちが作ってかなりのお金を稼ぐことができる職業として成り立っています。

2点目に、「牛のように歩く」と紹介した「牛歩き」について、若者と年記者の間の規範のせめぎ合いに関する質問がありました。「ヘレロのロングドレスを着たときには、誰でもゆっくり歩かないといけない」というのは、若者であれ年記者であれ、基本的には共通した感覚としてあると言えると思います。

ただし、それを実際に舞台上が上がってやりたいか、やりたくないかという、若い子に聞くとおそらく「いや」と言う人が多いだろうとは思いますが、あの動きをどこでみんな練習しているのか、そういうところまでは調査ができませんでした。ただし、デザインでの若者と年記者のせめぎ合いがあると言いましたが、基本的には若者がいつの時代も新しいことをやりたがってきたということはヘレロの人も言っているのを聞いたことがあります。そういった若者の新しい価値への欲望と、それまであった規範というのは、常にせめぎ合っているのではないかとお答えをさせていただきたいと思います。

■ ドイツでのショーについての評価および 開催地と継続をめぐるヘレロの状況

香室 3点目のベルリンの2010年のショーでドイツ人がヘレロのドレスと並んだ出し物をしたことについて、批判については私が知る限りではなかったです。ヘレロの人たちに聞いたところ、紹介したインゲという方のインタビューでも、かなり「感動した」という話でした。他のデザイナーの人たちからも、「あれはすごかった」という語りがありました。新聞記事などでも、批判というよりは友好的な見方が多かったとは思いますが。

ただし、ご指摘のとおり、もちろんそもそも対等ではない関係で、現在も経済的支援というかたちでドイツ人はかなり入っていますし、ナミビア国内の企

業にもドイツの資本が多く入っています。また、ホテルや商業施設の多くについてドイツ人の子孫が実権を握っており、土地にしても広大な土地をドイツ人の子孫が持っている状況です。ですから、日常的に対等ではないことはヘレロの人たちも常々感じていて、そういった前提があってああいうショーがあったので、私もどちらかと言うとユートピア的な見方をしてしまったところがあるかなと思いました。批判的な見方ももちろんできると思います。

4点目の質問で、日本の場合はパリへの憧れがあるという話ですが、ヘレロの人たちの場合はおそらく現状としてヘレロのロングドレスがヘレロ内で基本的には留まっているので、そこまで意識がいないのではないかとコメントをうかがって思いました。組織者の人たち、エリート層の男女の人たちは、現実的に可能だったらアトランタで開催しよう、パリでしょう、知り合いがいるから、コネクションがあるからという理由で、おそらくショーの場所を決定していたような話でした。もちろん、一般的にはパリへの憧れというものはあると思います。ただし、そのときは現実的に可能かという部分で話が動いていたように思います。実際にその後うまくいったのか聞きましたが、なかなかうまくいかず、実施はされなかったということです。

杉浦未樹先生の質問にも絡むので、杉浦先生からの2点目にここで答えようと思います。2012年に中止されたファッションショーも、組織者たちが自分たちの仕事をしながらファッションショーを善意というか情熱だけで行っている状況でした。それにFNBという銀行がスポンサーになってくれて、たまたま実施できていました。その資金繰りと組織者たちの尽力・献身が釣り合わなくなって、2013年以降は難しくなっていると聞いています。「もう続けなくていいの」と尋ねると、「ある程度私たちは役目を果たしたからいいんだ」と言っていました。

■ヘレロのロングドレスに関する

ドイツとナミビアでの受け止めと新たな展開

香室 杉浦先生の1点目の質問ですが、このロングドレスの着用をやめさせようという動きがあったのか、なかったのか、ドイツ側は実際どう受け取っていたのかという点です。ロングドレスの着用をやめさせようという動きは、私が知る限りでは聞いたことがありません。ただし、軍服を着て行進をしていた点

について、当時の支配者の南アフリカが「あの人たちは大きな抵抗を示しているのではないか」というところで引っかかって、監視の対象にしたことはありましたが、女性のドレスに関しては知る限りではないです。

ロングドレスに対してドイツ側の居心地の悪さはなかったのかについては、いま私が答えることはなかなか難しいと思います。そのときはおそらくドイツ側も、歴史的な背景というよりも、商品と言っているのかファッションと言っているのか、そういったところでおもしろくしようとしたのかなということは何となく思いました。

関連することとして、今後ヘレロのドレスを、たとえばナミビア出身のデザイナーがナミビアのデザインの一つとして、自分のデザインとしていくことも考えられるかなと思います。たとえば、ナミビア・ファッションショーの後にできたWindhoek Fashion Weekという2020年のイベントでは、名前からするとヘレロではないデザイナーがナミビアのかたちの一つ、スタイルの一つとして自分のデザインにヘレロのオシカイヴァなどを取り入れて発表したと推測される事例がありました。こうした動きも今後は出てくるだろうと思います。

また、ドイツ系のナミビア人女性がヘレロ女性の写真を撮っている事例が一つあります。ニコラ・ブランドという人ですが、その人は写真家で自分がヘレロを撮りつつ、自分もヘレロのロングドレスを着て被写体になっている写真があります。それをヘレロの人がどう受け取っているかという点意外に友好的で、自分たちのドレスを着てくれるということで受け入れている。これは最近の話ですが、そういう広がりもあって、それはロングドレスだからできるのだろうという実践で、どう解釈するかはこれからの課題ではありますが、興味深いと思っています。

杉浦先生の質問の3点目、文化財化する動きというのは、これもまだそこまでいっていないのではないかなという印象があります。ミャオ族の衣服を見て、言い方が難しいですが、やはりレベルが違う、歴史が違うという点、やはりヘレロのロングドレスとは違うものを感じました。刺繍の高い技術などさまざまな理由があると思いますが、そのレベルまではいっていないのではないかといまのところお答えしたいと思います。

■ 素材の入手が容易になることで もたらされた衣装の変化

香室 杉本星子先生のご質問で、素材に関して、第一次世界大戦と第二次世界大戦のあいだで日本やインドからも布が入ってきたのではないかと指摘がありました。これは私はまったく知らなかったので驚きを感じました。多く布が入ってきたことで、人々が布を手に入れて、布を使ったものがより作りやすくなったということは、おそらくあったのではないかと思います。現在のところ私から答えることはできません。

ただし、ポリエステルなどいろいろな布の素材がナミビアにも入っているので、その素材を使って可能になることもあります。ロングドレスで言うと、ペチコートがもともと布で、かなり重かったんですね。2メートルぐらいの布を3枚から7枚ぐらい重ねるので、ものすごく重くて動きづらい。それをポリエステルにしようという動きが最近あって、とても軽くなりました。それがまた、「これだったら着られるわ」と、若者も着やすくなるような工夫でもあるかと思っています。

それから、オシカイヴァという被り物は、じつは中に新聞紙が丸めて入っています。独立した1990年に降にこの被り物は普及しましたが、あるデザイナーが新聞紙を入れたら型が決まるということで始めて広がって、現在ではみんなそれを使っています。それ以前は木の棒を入れたり、砂糖で固めていたという話もあります。新しい素材でより型が決まったり、より自由になったりということはあるのではないかと思います。新聞自体も、1990年は国が独立した年であり、『ザ・ナミビアン』という新聞がその前年あたりから発刊され始めたので、おそらく一般の人が新聞を手に入れやすくなったことも関係しているかと思いました。

2点目の、自分たちのドレスを作るという動きが他の民族にもあるのかについては、他の民族の人たちも自分たちのドレスは持っていますが、いわゆる文化的な場や儀礼の場で主に着られているのではないかと思います。あまりヘレロの人のようにファッション化しようとか、ショーをするというのは聞いたことがありません。

帯谷 続いて松本先生、お願いします。

■ これまでにない速度で多様な商品を作り 全世界に一律に販売できる中国

松本ますみ 杉浦未樹先生の質問からお答えします。まず、グローバル化ということで、イギリスとの歴史比較ができるか、そのときに市場をどう考えるかというご質問だったと思います。ヨーロッパの場合は奴隷には安いものを高く売りつけようということがありました。現代は情報化の時代ですので、そういうことは難しく、品質によって価格帯が違ってきます。これに関しては平等であると言えると思います。

先ほど杉本星子先生が言っていたキラキラした装飾がついた衣装も、アリババのサイトで販売されていて、世界中の女性が買っています。当然ですが、価格はどこも同じです。アリババの何がすごいかというと、おそらく全世界についてほぼ送料無料で低廉です。また、日本のアプリでは商品説明、価格とも日本語に自動翻訳されて表示されますが、おそらくフランス語であればフランス語、ユーロになり、英語であれば英語、ドルになり、ロシア語であればロシア語、ルーブルになるというかたちで、価格の使い分けはされていないのだと思われます。

にもかかわらず、キーワードとしては「アバヤ・モロッコ風」、「ドバイ風」、「トルコ風」、「アラビア風」などが出てきて、やはりファッションがあるわけです。そのファッションをたとえばフランスの移民の女性たちが着る、アメリカの移民の女性たちが着るというかたちです。私は専門ではないのでわかりませんが、義烏で聞いた話を開陳しますと、「義烏の何がすごいのか、きみ知っているか」と言われて「何がすごいんでしょうか」と訊いたら、「サンプルがあれば48時間で何ダースも出荷できる」という話でした。いわゆるコピー文化と言えばいいのかもしれませんが、とにかく速いのです。ですから、まさに電光石火のようにファッションが伝播していく。かつてはファクスでしたが、現在はネットで、「こんな感じのものを作って」と伝えると、「こんな感じかい？」とサンプルができて、「それを何ダース作って」という発注が入る。それもオンラインで入ってくるので、おそらく流行もまったく速さが違ってきているのではないかなという気がします。

現在はどうかわかりませんが、一時ユニクロがイースラム・ファッションに進出するといっただけ話題になったことがあります。いろいろ見ていると、価格的に競争にならないですね。高過ぎです。ユニクロ・

ファッションではなくて、もう少し下のプライベート・ブランドでおしゃれをしたい全世界のムスリマに関しては、中国のアリババなどのサイトで買うのはベストの選択ではないかという気がします。お店に買いに行ってもどうせ同じようなものしかないわけですし、そういうところに入入りして変に目を付けられるのもいやですよ。そうすると、家でゆったりスマホで選んで注文をして家に届くというのは、私たちがこれまで経験したことがないようなファッションのあり方だと思いますが、ありなんだと納得しております。

■ 流行を生み出し発信し、流通と決裁を押さえてもはや世界中で「切れない存在」となった中国

松本 次に杉本先生の布の話についてです。かつて日本で考え出された刺繍の付いたものが輸出されて流行ったという話がありましたが、おそらく中国でも同じことが言えると思います。もちろん年によって流行がまったく違ったりもしますが、いまサイトを見ていて、キラキラする石を衣装にたくさん手で刺繍しているのはやはり高いですよ。ところが、シンプルなキラキラ・ストーンをつけたドレスなら、日本円で1,200円ぐらいで買ってしまう。ですので、発展途上国の若い女性にも、あるいはフランスのパリの郊外にいるような若い女性にも手を出しやすい商品なのではないでしょうか。つまり発信と流通事情、それから決済事情がとてもうまくいって、現在このAliExpressのようなアプリができていないのかという気がしております。

その意味では、越境は十分にあり得えます。ある商品が何個売れているのかを調べて、たとえば1,200ぐらいだと「流行っているな」と思ってコメント欄を見ると、コメントは本当に世界中から入っています。そうすると見ている人は、「世界的に流行ってるじゃん」ということになりますよね。本当に中国恐るべしで、よくウイグル問題で「不買運動をなぜ起こさないのか」、「イスラーム諸国は何をやっているのか」と言う人がいますが、実際に中国を切れるのかと言うと、おそらく切れないのが現状だと思います。

最後に、ニーズがあってそれに応えているのかという話で思い出したことがあります。2020年に、ヘジャブの下にかぶるある機能のついたキャップが発売されました。耳の部分にマスクをかけるためのボタンが付いている商品です。そういうニーズがコロ

ナ禍で2020年に生まれたので、急遽作って、アリババで売る。それがまた一つのファッションになっていくという循環が見られるかと思います。

帯谷 ありがとうございます。これからディスカッションを深めたいところですが、残念ながらあつという間に時間が来てしまいました。みなさんのお話をお伺いして、一言ではまとめられない充実した思いでいっぱいです。ご報告者のみなさん、コメントーターのみなさんからいただいたお話は、全体として本当にカラフルで厚みがあり、もう目も心も頭も満たされましたし、楽しませていただきました。本日のお話では、ある地域や民族特有の装いの商品化や流通、価値付けといった観点が、これまでのワークショップと比べるとかなりクローズアップされてきた印象を受けました。今回はどんなサブタイトルを付けようかと、いま考えているところです。

それでは、これで閉会とさせていただきます。とても実りある時間でした。報告者とコメントーターのみなさん、参加者のみなさん、本当にありがとうございました。